

氏名	千ヶ崎 祥平
学位の種類	博士(神学)
報告番号	甲520号
学位授与年月日	2019年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	イエス・パウロ・初期キリスト教における独身——周辺世界の事例との比較にみる動機の特徴——
審査委員	(主査) 廣石 望(立教大学大学院キリスト教学研究科教授) 長谷川 修一(立教大学大学院キリスト教学研究科准教授) 筒井 賢治(東京大学大学院総合文化研究科准教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

#### I. 序論

- I. 1. 研究の動機と意義
- I. 2. 研究目的・仮説
- I. 3. 研究方法
- I. 4. 本論文の構成

#### II. 初期ユダヤ教における独身

- II. 1. エッセネ派／クムラン宗団
  - II. 1. a. エッセネ派
  - II. 1. b. クムラン宗団
- II. 2. テラペウタイ
- II. 3. 初期ユダヤ教における独身

#### III. ギリシア・ローマ世界における独身

- III. 1. ウェスタの巫女
- III. 2. ストア派
- III. 3. ギリシア・ローマ世界における独身

#### IV. イエスにおける独身——マタ 19:10-12 の釈義

- IV. 1. マタ 19:10-12——本文と私訳
- IV. 2. 本文批評
- IV. 3. 伝承史的考察
- IV. 4. 真正性の問題
- IV. 5. 各節の考察
- IV. 6. 独身の動機——「神の国」を具現化する預言者的象徴行動

#### V. パウロにおける独身——I コリ 7 章の釈義

- V. 1. I コリ 7:1、7-8、25-35——本文と私訳
- V. 2. 本文批評
- V. 3. 各節の考察
- V. 4. 独身の動機
  - V. 4. a. 「主のこと」への専念——背景は終末論

V. 4. b. 童貞性・処女性の評価—聖性の追求

VI. 初期キリスト教における独身

VI. 1. アンティオキアのイグナティオス

VI. 2. アレクサンドリアのクレメンス

VI. 3. テルトゥリアヌス

VI. 4. 初期キリスト教における独身

VII. イエス・パウロ・初期キリスト教における独身

VII. 1. 各人物・集団における動機の特徴—周辺世界との比較から

VII. 1. a. 終末論

VII. 1. b. 特定の事柄への専念

VII. 1. c. 童貞性・処女性の重視

VII. 1. d. 性欲の罪悪視

VII. 1. e. 祭儀的清浄への関心

VII. 1. f. 神的存在の模倣

VII. 2. 通時的考察—独身をめぐり関心の推移

VII. 2. a. 童貞の称揚・性欲忌避・「キリストの模倣」が表面化  
—終末は観想対象に

VII. 2. b. 独身の預言者的機能—現世における来世的生活

VIII. 結論と今後の課題

VIII. 1. 結論

VIII. 2. 今後の課題

参考文献

(2) 論文の内容要旨

キリスト教には、結婚しないことに宗教的価値を賦与する伝統が存在する。本論文は、

古代ユダヤ教やギリシア・ローマ世界の典拠と比較しつつ、イエスから 4 世紀までの初期キリスト教に至る、宗教的独身に対する肯定的価値付けの動機の変遷を、その社会的・宗教的機能と合わせて、通時的な視点から明らかにすることを目的とする。

第 I 章は、研究の動機、目的と仮説、方法、論文の構成について説明する。

第 II 章は、エッセネ派が祭儀的な清浄性の維持を目的に性的交わりを回避したと推論し、またテラペウタイに参加した女性たちが、知恵の探求に専念するために性欲を放棄したと論じる。この実践は、後代のラビ・ユダヤ教が旧約思想を継承しつつ、独身に対して概して否定的であるのと対照的である。

第 III 章は、同時代のギリシア・ローマ世界から、ウェスタの巫女が国家安寧を保証する聖火を守るために純潔を義務づけられたのは処女神を模倣するものであり、また「不動心」を重んじたストア派が、独身をプログラムとしては提唱しなかったが、一部の者は哲学への献身のために独身を選択したと論じる。

第 IV 章は、マタイ福音書 19 章 10-12 節に保存された「天の国のための宦官」という表現をとりあげ、宗教的独身者を自己去勢者とするこの隠喩表現が史的イエスに遡ると論じ、その背後に、復活すると人は「天使のように」なる（マコ 12:25）とする古代ユダヤ教の思想を想定し、イエスの独身が来るべき「神の国」を先駆的に体現する預言者の象徴行動であったとする。

第 V 章では、パウロによる独身の奨励（I コリ 7 章）をとりあげ、パウロが「主のこと」への専念の点で独身者を既婚者よりも高く評価していると考え、聖性および童貞性・処女性への彼の関心が、性交渉が汚れをもたらすという思想（レビ 15:18）に依拠していると推論する。

第 VI 章は、4 世紀までの初期教父をとりあげ（イグナティオス、アレクサンドリアのクレメンス、テルトゥリアヌスその他）、彼らに身体的聖性の追求、性的欲望の忌避、また「キリストの模倣」（*imitatio Christi*）などの動機が認められる一方で、終末待望の動機は著しく後退し、終末は観想対象に変化している（ニュッサのグレゴリオス、シリアのエフREM）と論じる。

第 VII 章は、第 II 章から第 VI 章までの分析を踏まえて、独身の動機づけ及び思想的背景の変遷について論じる。大まかに言えば、イエスとパウロでは、同時代のユダヤ教との比較においても、切迫した終末期待による動機づけが特徴的である一方で、初期キリスト教における独身の動機は、周辺のヘレニズム世界から、部分的には初期ユダヤ教を経由して、多様な思想的背景の下でキリスト教化を経て採用され、多様化するに至った。

最終章である第 VIII 章は全体のまとめであり、今後の展望が示される。

## II. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

キリスト教は、独身という身体の使用法を宗教的な自覚ないし社会へのメッセージの表現手段として用いる伝統を発展させた。そうした伝統が発生する以前、すなわちイエスから初期キリスト教に至る時代に、独身であることはどのような宗教的な動機づけによって担われ、またどのようなメッセージを発信するために用いられたのか。本研究は、初期ユダヤ教、ギリシア・ローマ世界、イエス、パウロ、そして初期キリスト教（4世紀までの教父）から、独身を肯定的に評価する典拠をとりあげ、丹念な分析を通して、その動機の変遷を通時的に追うことで、この問いに答えようとする。

本研究の独自性は、当該テキストの精緻な分析と、分析結果を総合するさいの宗教史的な考察にある。後者に関連して著者は、「終末論」「専念」「童貞性・処女性」「性欲の罪悪視」「祭儀的清浄」そして「神の模倣」の計6つの動機を区別する。その結果、パウロがイエスに特徴的な「終末論」的な動機と並んで、エッセネ派やウェスタの巫女に特徴的な「祭儀的清浄」の動機を共有する一方で、テラペウタイやラビのベン・アッザイ、さらにストア派エピクテトスと「専念」の動機を、またイグナティオスその他の初期教父と「童貞性・処女性」の動機をも共有することが判明する。同時に、「性欲の罪悪視」や「神の模倣」といった動機は、ウェスタの巫女の事例を除けば、イグナティオスやアテナゴラスに至って初めて明瞭に現れることが明らかになった。

### (2) 論文の評価

本研究はヘブライ語、ギリシア語、ラテン語の一次文献を対象に、英語、ドイツ語、フランス語で書かれた二次文献も丹念に跋渉することで、時代的に幅のある主題について、個々のテキストの個性を尊重しつつ、その発展を通時的に追った力作である。ユダヤ学、聖書考古学、西洋古典学、教父学等の隣接諸学の知見を総合する点も、本研究の大きな強みである。テキストの個別釈義を超えて、先行研究との構造的な対論を通してテーゼを学説史的により明確化することで、またイエスやパウロが独身を宗教的メッセージの積極的な発信媒体としては用いていない可能性を慎重に考慮することで、また初期教父におけるヘレニズム文化に由来する諸動機が、どのような言説的な力学空間の中で使用されたかを資料範囲を拡大して明確化することで、本研究の本質的な貢献は、より輪郭のはっきりしたものとなるであろう。そのさい、著者が今回は研究対象から除外したグノーシス系文書や外典行伝の検証が行われることが期待される。